

日高義博新学長に聞く

人間性と倫理観を 備えた人材育成へ

グランドデザイン描く



持論は『文武一如』

滞在3年で身に付けたドイツ流の学問研究法

80年(昭55)から2年間、ドイツのトリーア大学留学。91年(平2)から1年間、同大学法学部客員教授。ゆったりと流れる時間の中で腰を据えた研究を行うドイツ流の過ごし方を学ぶ。趣味は居合道(五段)のほか尺八(琴古流名取)、木彫画。武道は、精神的鍛錬の場として日高学長にとってなくてはならないものになっている。「文武の到達点は同じ。『文武両道』ではなく『文武一如』が持論。家族は妻と二人。座右の銘は「畏れず、怯まず、凜として生きる」。

略歴

1948年(昭23)宮崎県生まれ。70年(昭45)専修大学法学部卒業。75年(昭50)明治学院大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。同年専修大学法学部専任講師。77年(昭52)助教授。84年(昭59)教授。2004年(平16)法科大学院教授。今村法律研究室長、法学部長、学外では司法試験考査委員、法

9月1日に専修大学学長に就任した日高義博教授に、今後の本学のあり方、抱負を伺った。

――少子化の影響により志願者数の激減、さらには「大学全入時代」到来が間近という、厳しい時期に学長に就任されました。

私立大学が直面している状況は、きわめて厳しいものがあります。今後、大学のランク付けは上位層と下位層に二極分化されていく可能性が高い。こういう状況において志願者の確保と学力水準の維持・向上へ、大学運営の打つ手を誤れば取り返しのつかないことになりかねません。教学と法人が一体となってその打開策を講じる必要に迫られており、教学の代表者として責任の重さを強く感じています。この先、数年間が勝負でしょう。「学生を基本に据えた大学運営」を諸策の中に反映していくことが肝要です。

――具体的な打開策をお聞かせください。

まず、グランドデザインを描き出すことです。大学が掲げる教育・研究の目標を達成するための方向性と、将来構想をいかにするかということです。専修大学はどういう学生を確保し、育てて、社会へ送り出すか。そのための教育スキル、キャンパスや研究環境の整備など、大学のブランドイメージを高めていくために、グランドデザインは極めて重要なものです。それは、本学の戦略を策定する際の骨子となるものでもあります。その構築に向かって真剣に取り組まなければなりません。

――グランドデザインを描き出す際に、本学の特徴として、第一に挙げられるものはなんでしょう。

創業者である相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格の4人の「熱き思い」です。明治維新後、米国留学で近代法の洗礼を受け、祖国日本の社会を支える人的基盤を、大学教育によって確立しようとしたのです。創業者たちのこの熱き思いは建学の精神として尊いものであり、我々の誇りです。本学は創立125周年を迎えようとしています。4人が生きていたら今の日本の社会にどんな人材を送り出そうとするか。それは、本学

制審議会臨時委員などを歴任。専攻は刑法学。法学博士。『不真正不作為犯の理論』(慶応通信)、『刑法における錯誤論の新展開』(成文堂)、『現代刑法論争 I』(共著、勁草書房)など著書、論文、翻訳、エッセー多数。

が21世紀ビジョンとして打ち出した「社会知性の開発」にたどり着くと確信します。近代法の考え方を市民生活の中に根付かせようとした目線を忘れることなく、人間性豊かな有為な人材を育成していかなければなりません。その精神は、本学の法科大学院の設置にも生きています。

――創立者の精神は、現代にも脈々

と息づいているということですね。

そうした歴史を持つ大学で教育を受けているということに、学生諸君は自信を持ってほしい。その上で新たな学業支援体制を敷き、これまで以上にキメ細かな教育を目指していきます。

人と人との信頼関係がなければ人間性豊かな人物を社会に送り出すことは出来ません。人間教育の現場では、教員が学者としての生き様を見せることが重要であり、それが学生に感銘を与えるものと信じています。今後もそんな生き方を貫ける研究者であり、教育者でありたいと思います。

【ニュース専修2004年9月号1面】

二部学生会「サマーエンカウンターツアー」

上野原で伐採体験も



8月21日二部学生会の「サマーエンカウンターツアー」(前橋淳仁実行委員長・2)が富士山中湖セミナーハウスで行われた。学生ら29人が参加、「働くこと」をテーマにディスカッション、上野原で伐採を体験した=写真。

【ニュース専修2004年9月号1面】

吹奏楽研究会も出演

民家園通り商店街夏祭り



7月17日、川崎市多摩区の「民家園通り商店街夏祭り」に吹奏楽研究会が出演＝写真。今年は専大ブースで、うちわなどをプレゼント。魚田勝臣ゼミ(経営学部)、国際研修館有志も、地域の方々と交流した。

【ニュース専修2004年9月号1面】

キャンパス探訪 <19>

アートの旅『叡智の泉』



叡智(えいち)は英知と同じ。「深遠な道理をさとりうるすぐれた才知」(広辞苑)であり、単なる知識の集積ではない。狭い穴を穿つように、絶えることなく湧きだし、大地を潤す。生田キャンパス120年記念館(9号館)正面玄関前のモニュメント。湧出口の一对の石から連なる四つの石は、相馬永胤ら本学創立者四人を象徴する。98年(平10)育友会が9号

館完成と、会の創立40周年を祝って寄贈した。

湧出口の石は4人が留学した米国にちなむテキサスピンクという石、他は国内の稲田石である。制作は彫刻家の浅田正治氏、銘板には書家でもある仲川恭司文学部教授が揮毫(きごう)した。石を伝う流れと、柔らかく包む木立ちの生長を、絶やすことなく引き継いでいこう。

【ニュース専修2004年9月号1面】